

---

# ほろびのボタン

あずまや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ほろびのボタン

### 【Zコード】

Z6531F

### 【作者名】

あずまや

### 【あらすじ】

人類が滅亡し、地上で最後の人間となってしまった二人の老科学者は、絶望のあまり地球を破壊しようとするのだが、小さな誤解から思いもよらない結末を迎えることに……。

「後悔しないな？」

『ハゲ』は言った。

「無論だ。ただ……」

『髭』は顎をさすった。

「ただ？」

「私の前に立つてするのが美しい淑女<sup>レディ</sup>だったとしたら、話は別だがね」

「この際、美しいかどうかは問題じゃないだろ？。ついてるもんがついとれば」

ハゲは両手を突きだすと、慣れた手つきで架空の『何か』をもみしだいてみせた。

「フン、君はずっとそんなだから、そんな頭になつたのだ」髭は舞台のような形の装置に足を向けると、掌ほどもあるボタンに手をかけた。「たとえ君が最後の女だったとしても、私は絶対に子孫を残そうなどとは思わん！」

「それにしても」ハゲは苦笑した。「毎年きつちり風邪をひくような老人一人が生き残つてしまつとはなあ……」

「大いなる自然、大いなる地球から見れば、我々の知恵など赤子とそつ変わらないということや」

「ダア！」ハゲは丸めた両手をぶんぶん振つてみせた。「しょんなチミは、ちきゅーをこつぱみじんにちようどちてるるる」

髭はうなだれ、そしてククと笑つた。

「そう。我々をここまで追いかんだ自然に対する、最後の悪あがきだよ」

ハゲは崩れた顔を元に戻すと、友に歩み寄つた。

「手を貸そう。だがその前に一つ、聞かせてほしい」

「何だね？」

「ずいぶんとコンパクトな装置に見えるが、本当にこんなものでいいのかね？」

「こいつに限っては、理論さえわかれば、あとはジェットコースターに乗ったようなものだよ」

「そうか……」

ハゲは髪の手に手を添えた。

一人は「せえの」でボタンを押した。

世界は音を失い、無量の光に包まれた。

\* \* \*

話は五十年前にさかのぼる。

『若ハゲ』と『バカ髪』は、その大学では知らぬ者などいない、一大名物ともいえる存在だった。一人はキャンパスで出くわすたびに、互いの研究をくだらないと、人垣ができるまで罵り合っていた。ある日のこと。若ハゲは廊下で女たちと談笑していると、不意に顎をしゃくった。

「おっ、バカ髪様のお通りだ」

バカ髪は足を止め、こわばつた顔をくつと横に向けた。

「何度も言つたらわかるんだ！ 僕はバカではない。これでも成績は三年連続で学年トップなんだ！」

若ハゲは笑い、つられて女たちも笑う。

「だーからバカだつてんの」

「どういう意味だ！」

「ところでおまえ、どうやつたら子供ができるか、知つてつか？」

「いきなりなんだ」

「知つてるのか？ 知らないのか？」

「バカにするな。そんなことぐらい、今どき小学生でも知つてる」「なら俺に教えてくれよ。ベンキヨー嫌いだからさあ、そこらへん、ちょっと自信ないんだよねえ」

「そんなことでよく理系の学部に入れたものだ」

バカ髭は受精から出産までの流れを淡々と語つた。

二人の間を、生真面目そうな女が通りかかる。

若ハゲは女の肩に腕をまわすと大笑いした。

「なるほど、それが百点の解答か！」

なんのことかわからず、どぎまぎする女。

「じゃあ、俺は何点かな？」

色男は見知らぬ女を抱き寄せると、唇を奪い、その豊かな胸を…。

若ハゲの病床を訪れたバカ髭は、眠れる男の足のギプスに、盛りのついた犬の絵を描いて一言添え、そのまま去つた。

『君はずっとそんなんだから、そんな頭になつたのだ』

\* \* \*

学生の頃から犬猿の仲で知られていた二人が力を合わせ、人類を滅亡の危機に追いこんだ殺人ウイルスを撲滅したなど、ノーベル賞授賞式に顔を見せた人々は本気で信じようとはしなかつた。

授賞式の後、ホテルへ向かうリムジンに乗り合わせた二人。

うつむき加減に前をにらんだまま、髭は言った。

「どうも引っかかることがあるんだが……」

窓越しに北国の夜景を眺めながら、ハゲはグラスを傾けた。

「ん？ アソコに石でもつまつたか？」

「茶化すな。なぜかはわからんのだが、一度今ぐらいの歳の自分が、君と一緒に『地球破壊装置』のボタンを押してしまったような気がしてならないんだ」

ハゲは笑つて、老いた友の蝶ネクタイを引っ張つた。

「そりやおまえさん、デジヤヴューというやつだよ。我々は神に与えられた役目をまつとうしたのだ。残りの人生はおまけのようなも

の。お互い、そろそろ若い者に道を譲らうつじやないか  
「まだだ。アレを完成させるまで、私は退けんのだ」

ハゲは荒野にぽつんと一つある巨大なドーム施設を訪れた。アレがついに完成したというのだ。田舎からきたツアーライター客のような歓声をさんざんまき散らしながら、ハゲは施設の奥へ入つていった。工場やコンビナートを思わせる無数のタンクやパイプの海原の底で、髭は舞台のような装置の、掌ほどもあるボタンに手をかけようとしていた。

ハゲは旧友に声をかけた。

「で、今おまえさんが動かそうとしているのが、例のアレか?」

「ああ」

「やけに大がかりな装置じやないか」

「理論さえわかれれば……と思つていたんだが、実用となるところがなかなか大変でね」

「設計図を見せてくれないか」

髭は天に向かつて声を張つた。

「ファイルナンバー『99』を開け!」

上空に青く透けた平面がふつと現れた。

「ふむ……」

「これが私の長年の夢、『時空巻き戻し機<sup>タイムローリンダ</sup>』だ。今日は試しに十秒だけ戻してみせよう

台上のボタンにしわしわの手がかかる。

ハゲは叫んだ。

「ま、待て! これじゃあ地球をバラバラにしちまつ!」

「なんだって?」

髭はとっさにボタンの横を叩く。

頭上の画面をにらみつけ、やがてククと笑つた。

「なるほど。危ういところだった」

「なーにが『なるほど』だ! 何をどう間違えたらそうなるんだ!」

「まあ、そう怒るな。タイムリワインダーと地球破壊装置は、規模

は違えど、突きつめていくと部品一つの差しかないのだよ」

「規模で気づけ！ このバカ髭が！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6531f/>

---

ほろびのボタン

2010年10月8日15時37分発行